

博士論文（要約）

論文題目 日本語音節構造史の研究

氏名 肥爪 周二

目次

序論

第一章 本論文の構成	2
第二章 本論文の理論的立場	11
第一節 通時的研究であること	11
第二節 依拠する音韻理論	14
第三節 「音節」について	17
第四節 機能論的音韻史について	21
第三章 上代語・先上代語・日琉祖語の音節構造	25
第一節 はじめに	25
第二節 上代語の音節構造	26
第三節 先上代語・日琉祖語の音節構造	27
第一項 先上代語・日琉祖語について	27
第二項 二重母音・長母音について	31
第三項 閉音節について	34

本論

第一部 拗音論	41
序章 拗音—その概念と分布の偏り—	41
第一節 拗音の概念規定	41
第二節 開拗音の分布（呉音・漢音）	43
第三節 開拗音の分布（唐音・オノマトペ他）	44
第一章 ア段拗音—拗音仮名「茶（茶）」をめぐる—	49
第一節 はじめに	49
第二節 ア段拗音の分布の偏り	50
第三節 拗音仮名	52
第四節 「茶」の字音	55
第五節 音訳漢字としての「茶」	57
第六節 仮名としての「茶」	58
第七節 「ダ」に相当する濁音仮名	60
第八節 むすび	61
第二章 ウ段開拗音の沿革	63
第一節 ウ段拗音の分布の偏り	63
第二節 拗音表記の歴史からの解釈	68
第三節 等時性からの考察	70
第四節 なぜウ段開拗音のみア行表記で定着したか	73
第五節 なぜ「シユ」だけ存在できたのか	74
第六節 「シユ」の波及	76
第七節 「チユ」の考察	79

第八節	なぜ「㊦ウ形」は一拍化しなかったのか	81
第九節	悉曇学との関わり	81
第一〇節	概念としての「拗音」	83
第一一節	むすび	85
第三章	唇音と拗音	89
第一節	唇音・拗音の結合の偏り	89
第二節	漢音についての説明	91
第三節	漢音における例外	94
第四節	呉音についての説明	95
第五節	むすび	96
第四章	拗音と韻尾の共起制限	98
第一節	拗音・韻尾の組み合わせの偏り	98
第二節	朝鮮漢字音との対照	100
第一項	「拗音」が期待される漢字	100
第二項	「拗音」が現れる漢字	104
第三節	考察	107
第五章	合拗音の受容	110
第一節	外来音の受容	110
第二節	拗音の受容に関する先行学説	111
第三節	開拗音・合拗音の受容の差異	114
第四節	分解圧縮法による開拗音の受容	117
第五節	合拗音の「あきま」への受容	118
第六節	止摂合口字について	121
付章	サ行子音の音価とサ行開拗音	124
第二部	二重母音・長母音論	129
第一章	/CVV/音節（二重母音）の歴史	129
第一節	音韻論的解釈としての二重母音	129
第二節	/CVu/音節の歴史	133
第三節	音節組織の組み替え	138
第四節	むすび	141
第二章	長母音成立の音韻論的解釈	143
第一節	引き音素について	143
第二節	音韻論的解釈としての長母音	143
第三節	才段長音開合の音韻論的解釈	145
第四節	㊦ウの拗長音化	148
第五節	㊧ウの拗音化	149
第六節	イ音便・ウ音便の結果としての/Ciɨ/・/Cuu/音節の登場	150
第七節	引き音素の成立	151
第三章	江戸語の連母音音訛	152

第一節	二重母音・母音接続と長母音化	152
第二節	二重母音・母音接続の規定	154
第三節	実例の分析	156
第一項	『浮世風呂』の「おべか」「おさる」	156
第二項	『浮世風呂』の「三助」	159
第三項	補遺	161
第四節	まとめ	162
第三部	撥音・促音論	164
第一章	二種の撥音便	164
第一節	二種の撥音便について（中田説）	164
第二節	中田説の疑問点	167
第三節	中田説の修正案	170
第四節	二種の撥音の統合	174
第二章	m音便とウ音便	178
第一節	複数の撥音を総合する先行学説	178
第二節	先行学説に対する疑問	179
第三節	事実の整理	181
第一項	漢字音 ng 韻尾	181
第二項	オノマトペ	182
第三項	推量の助動詞	184
第四項	バ行・マ行四段動詞の音便形	184
第五項	その他のm音便とウ音便の交替	186
第六項	m韻尾の「ウ表記」他	188
第四節	中世後期の撥音の音声について	189
第五節	「ウ」で表記される撥音について	192
第六節	近代的撥音の成立	193
第七節	バ行・マ行四段動詞の撥音便化	194
第八節	むすび	195
第三章	リ延長強勢オノマトペ	
—	「ひいやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふんわり」へ—	198
第一節	撥音と促音の非対称性	198
第二節	オノマトペにおける撥音挿入の時代差	200
第三節	接近音の前の撥音挿入	202
第四節	「ひつやり」について	205
第五節	撥音史からの解釈	207
第六節	類推が制限された理由	208
第四章	撥音と鼻音韻尾	210
第一節	借用語における音節末鼻音	210
第二節	国語音主導表記と漢字音主導表記	211

第三節	訓点資料の鼻音韻尾表記	214
第四節	平仮名文献の鼻音韻尾表記	218
第五節	むすび	225
第五章	ng 韻尾・清濁の表記の相関	226
第一節	現代の漢字音における ng 韻尾	226
第二節	ng 韻尾の鼻音性	228
第一項	鼻音性の痕跡	228
第二項	類音表記・零表記	228
第三項	特殊符号表記	230
第四項	補助符号表記	233
第五項	鼻音韻尾把握のバリエーション	234
第三節	ng 韻尾・清濁の表記の対照	235
第一項	表記のレベルの相関関係	235
第二項	東寺観智院本『悉曇章抄中抄』	239
第三項	この節のまとめ	240
第四節	物名歌	241
第五節	『悉曇要集記』奥文の音図	242
第六節	むすび	243
第六章	ng 韻尾の鼻音性—㊦イの形を取る場合—	246
第一節	ng 韻尾の鼻音性の表記	246
第二節	「㊦イ」における鼻音性の問題	248
第一項	中国原音の音価	248
第二項	新漢音資料からの検討	251
第三項	呉音・漢音の観点からの検討	252
第三節	悉曇学からの説明	253
第四節	明覚『梵字形音義』	256
第五節	心蓮『悉曇相伝』	258
第六節	むすび	259
第七章	Φ 音便について	261
第一節	m 音便と量的撥音便	261
第二節	Φ 音便説	262
第三節	ハ行四段動詞音便形の「ム表記」	265
第一項	先行研究とその問題点	265
第二項	『不動儀軌』万寿二年写本	267
第三項	『三論祖師相伝』鎌倉初期写本	270
第四項	『高山寺本古往来』院政期点	272
第五項	『大毘盧遮那経疏』卷第二延久二年点	274
第六項	楊守敬本『将門記』平安後期点	275
第七項	この節のまとめ	278
第四節	語末位置のΦ音便	279

第五節	ハ行四段動詞音便形の相互関係	
—Φ音便が早く消滅した理由—	282
第四部	清濁論	289
第一章	清濁についての研究史	
—共通理解とすべき事柄—	289
第一節	音配列制限の問題	290
第二節	表記の問題	292
第三節	前鼻音の問題	292
第四節	連濁の問題	296
第五節	連声濁の問題	300
第六節	アクセントに似た性質を持つ問題	303
第七節	用語の問題	306
第二章	ガ行鼻濁音の歴史	308
第一節	ガ行子音に関わる文献資料の記述	308
第二節	山県大弐のガ行音観察	311
第三節	行智のガ行音観察	313
第一項	江戸語音韻資料としての行智の悉曇学	313
第二項	行智の著作の時期区分	314
第三項	ガ行音観察の実際	316
第四項	変化過程の検討	318
第四節	方言のガ行音	319
第五節	白圈表記について	321
第六節	むすび	322
第三章	連濁の起源	325
第一節	連濁の起源についての諸説	325
第一項	同化説	325
第二項	古音残存説	331
第三項	連声濁説	333
第二節	内部境界強調説（再分割説）	343
第一項	諸種の濁音の歴史的順序	349
第二項	清音の濁音化と促音挿入	349
第三項	「強調」に伴う前鼻音の発達	354
第三節	連濁をめぐる補説	361
【補説①】	「圧ぬき」について	362
【補説①の補説】	音韻史叙述のレトリックについて	374
【補説②】	結合標示と境界標示の両立について	378
【補説③】	清濁の対立のない方言について	385
【補説④】	日琉祖語における子音体系について	385
【補説⑤】	語頭濁音について	388

【補説⑥】	ライマンの法則について	390
【補説⑦】	文節境界の濁音化について	391
【補説⑧】	単純語内部の濁音化について	394
【補説⑨】	非連濁形について	396
【補説⑩】	サ行の連濁について	397
【補説⑪】	ローゼンの法則について	398
【補説⑫】	前鼻音の起源について	400
【補説⑬】	撥音挿入形について	404
【補説⑭】	東北方言における母音の無声化について	405
【補説⑮】	アクセントに似た性質について	411
【補説⑯】	濁音形のオノマトペについて	412
【補説⑰】	促音・撥音との関係について	413
第四章	龍麿の仮説	416
第一節	連濁に関わる未解明の問題	416
第二節	先行研究における龍麿の仮説の扱い	416
第三節	『古言清濁考』における関連記事	417
第四節	「川」を後項とする複合語	418
第五節	龍麿の仮説の検証	422
第五章	m音便の後の清濁	427
第一節	一般的な理解への疑問	427
第二節	議論の前提としての二種の撥音便	428
第三節	『類聚名義抄』による検討	430
第四節	m音便に後接する「たまふ」	433
第五節	むすび	435
各章と既発表の論文との関係		438
参考文献		441
引用文献資料一覧		460

本文

博士論文の全部がすでに図書として出版されており、契約内容により、インターネット公表に対する許諾が得られていない。

肥爪周二『日本語音節構造史の研究』（汲古書院、2019年1月刊）

ISBN 9784762936395

参考文献一覧

- 浅田健太朗（二〇〇〇）「声明資料における入声音」（『国語学』二〇三）
- 朝山信彌（一九四三）「国語の頭音節における濁音について」（『国語と国文学』二〇ノ五）
→朝山（一九九二）
- 朝山信彌（一九九二）『朝山信彌国語学論集』（和泉書院）
- 有坂秀世（一九三一）「国語にあらはれる一種の母音交替について」（『音声の研究』四）
→有坂（一九四四）
- 有坂秀世（一九三四）「母音交替の法則について」（『音声学協会会報』三四）
→有坂（一九四四）
- 有坂秀世（一九三六 a）「奈良朝以前の国語に於ける撥音の存否」（『国語研究』四ノ一）
→有坂（一九八九）
- 有坂秀世（一九三六 b）「上代に於けるサ行の頭音」（『国語と国文学』一三ノ一）
→有坂（一九四四）
- 有坂秀世（一九三七～三九）「カールグレン氏の拗音説を評す」（『音声学協会会報』四九・五一・五三・五八）→有坂（一九四四）
- 有坂秀世（一九四〇）『音韻論』（三省堂）→増補版（一九五九、三省堂）
- 有坂秀世（一九四四）『国語音韻史の研究』（明世堂書店）
→増補新版（一九五七、三省堂）
- 有坂秀世（一九五五）『上代音韻攷』（三省堂）
- 有坂秀世（一九八九）『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』（有坂愛彦・慶谷寿信編、三省堂）
- 李基文（一九七五）『韓国語の歴史』（村山七郎監修・藤本幸夫訳、大修館書店）
- 石村喜英（一九七七）『梵字事典』（歴史編執筆）（雄山閣出版）
- 出雲朝子（一九八二）『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』（桜楓社）
- 伊藤智ゆき（二〇〇七）『朝鮮漢字音研究』（汲古書院）
- 犬飼隆（一九九二）『上代文字言語の研究』（笠間書院）
- 犬飼隆（二〇〇五）『木簡による日本語書記史』（笠間書院）
- 井上史雄（一九六八）「東北方言の子音体系」（『言語研究』五二）→井上（二〇〇〇）
- 井上史雄（一九七一）「ガ行子音の分布と歴史」（『国語学』八六）→井上（一九九四）
- 井上史雄（一九八〇）「言語の構造の変遷」（『講座言語 第1巻』大修館書店）
→井上（二〇〇〇）
- 井上史雄（一九九四）『方言学の新地平』（明治書院）
- 井上史雄（二〇〇〇）『東北方言の変遷』（秋山書店）
- 上田万年（一八九五）「清濁音」（『帝国文学』一ノ六・九）→上田（一八九七）
- 上田万年（一八九七）『国語のため』（富山房）
- 上田万年（一八九八）「P音考」（『帝国文学』四ノ一）→上田（一九〇三）
- 上田万年（一九〇三）『国語のため 第二』（富山房）
- 上村幸雄（二〇〇〇）「八重山から東北方言まで一日本語の方言形成過程について」（『宮良當壮記念論集』宮良當壮生誕百年記念事業期成会）

- 牛窪弘善（一九三七）「修験道学匠考（三）」（『修験』八三）
- 内間直仁（二〇〇四）「古代日本語のワ行子音 [b] 音化について—宮古・八重山方言を中心に—」（『国語学』二一七）
- 榎垣実（一九四三）『日本外来語の研究』（青年通信社）
- 榎垣実（一九六一）『バラとさくら—日英比較語学入門』（大修館書店）
- 江口泰生（一九八六）『シウ』・『シユ』・『シユウ』（『文献探求』一八）
- 遠藤邦基（一九七四 a）「古代語の音節構造の性格—ゼロ表記の意味を中心に—」（『岐阜大学国語国文学』一〇）→遠藤邦基（一九八九）
- 遠藤邦基（一九七四 b）「類音としてみたる清・濁の関係—掛け詞を手がかりにして—」（『王朝』七）→遠藤邦基（一九八九）
- 遠藤邦基（一九七六）「上代の語頭濁音—「打出」の訓みを中心に—」（『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』二四）
- 遠藤邦基（一九七七）「濁音減価意識—語頭の清濁を異にする二重語を対象に—」（『国語国文』四六ノ四）→遠藤邦基（一九八九）
- 遠藤邦基（一九八一）「非連濁の法則の消長とその意味—濁子音と鼻音との関係から—」（『国語国文』五〇ノ三）→遠藤邦基（一九八九）
- 遠藤邦基（一九八九）『国語表現と音韻現象』（新典社）
- 遠藤嘉基（一九五三）『訓点資料と訓点語の研究』（改訂版、中央図書出版社）
- 大塚光信（一九五五）「バ四・マ四の音便形」（『国語国文』二四ノ三）→大塚（一九九六）
- 大塚光信（一九九六）『抄物キリシタン資料私注』（清文堂）
- 大槻信（一九九九）「にごり」（『北海道大学 国語国文研究』一一二）
- 大坪併治（一九五六）「石山寺本大般涅槃經の訓点（上）」（『島根大学論集（人文科学）』六）
- 大坪併治（一九六八）『訓点資料の研究』（風間書房）→『大坪併治著作集 7』（風間書房、二〇一六）
- 大坪併治（一九七六）「漢書楊雄伝天曆点解説文」（『岡山大学法文学部紀要』三六）
- 大坪併治（一八八九）『擬聲語の研究』（明治書院）→『大坪併治著作集12』（風間書房、二〇〇六）
- 大野晋（一九五三）『上代仮名遣の研究 日本書紀の假名を中心として』（岩波書店）
- 大橋純一（二〇〇二）『東北方言音声の研究』（おうふう）
- 大矢透（一九〇九）『仮名遣及仮名字体沿革史料 全』（勉誠社版一九六九による）
- 岡島昭浩（一九九〇）「唐音語存疑」（『文献探求』二五）
- 岡島昭浩（二〇〇一）「半濁音名義考」（『筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念論文集』（風間書房）
- 岡田希雄（一九四一）「日本梵語辞書史概説—心覚より江戸期まで—」（『立命館大学法文学部文学科創設記念論文集』）
- 岡田希雄（一九四二）「行智の梵語辞書『両面錦』」（『龍谷学報』三三二）
- 奥村三雄（一九五五）「撥音シの性格—表記と音価の問題—」（『国語学』二三）
- 奥村三雄（一九八八）「V 3 日本語の音韻」（金田一春彦・林大・柴田武編集責任『日本語百科大事典』大修館書店）

- 小倉進平（一九一〇）『ライマン』氏の連濁論（『國學院雑誌』一六ノ七・八）
→小倉進平（一九二〇）
- 小倉進平（一九二〇）『国語及朝鮮語のため』（ウツボヤ書店）
- 小倉肇（一九九五）『日本呉音の研究』（新典社）
- 小倉肇（二〇一一）『日本語音韻史論考』（和泉書院）
- 小倉肇（二〇一四）『続日本呉音の研究』（和泉書院）
- 柏谷嘉弘（一九六五）「図書寮本文鏡秘府論字音点」（『訓点語と訓点資料』三〇）
- 春日和男（一九六〇）「続三宝絵詞東大寺切管見一字音語の表記について」（『国語国文』二九ノ一）→春日和男（一九七五）
- 春日和男（一九七五）『説話の語文—古代説話文の研究』（桜楓社）
- 春日政治（一九三四）「高野山にて観たる古点本一二」（『文学研究』七）
→春日政治（一九五六）
- 春日政治（一九三八）「聖語蔵本央掘魔羅經の字音点」（『文学研究』二三）
→春日政治（一九五六）
- 春日政治（一九四〇）「聖語蔵本唐写阿毘達磨雜集論の古点について」（安藤教授還暦記念会編『安藤教授還暦祝賀記念論文集』三省堂）→春日政治（一九五六）
- 春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』（岩波書店）
→春日政治著作集別巻（勉誠社、一九八五）
- 春日政治（一九五六）『古訓点の研究』（風間書房）→春日政治著作集第六巻（勉誠社、一九八四）
- 金沢庄三郎（一九三三）『濯足庵蔵書六十一種』（還暦祝賀会）
- 金沢庄三郎（一九四八）『亜細亜研究に関する文献—濯足庵蔵書七十七種—』（創元社）
- 金田弘（一九七六）『洞門抄物と国語研究』（桜楓社）
- 金山正好（一九八一）『梵字悉曇』（田久保周誉氏著の補筆部分、平河出版社）
- 亀井孝（一九四七）「八咫鳥はなんと鳴いたか」（『ぬはり』二一ノ一～四）
→亀井（一九八四）
- 亀井孝（一九五〇）「蜷縮涼鼓集を中心にみた四つがな」（『国語学』四）
→亀井（一九八四）
- 亀井孝（一九五四）「『ツル』と『イト』—日本語の系統の問題を考へる上の参考として—」（『国語学』一六）→亀井（一九七三）
- 亀井孝（一九五六）「ガ行のかな」（『国語と国文学』三三ノ九）→亀井（一九八四）
- 亀井孝（一九五八）「中世における文体の崩壊の問題」（『文学』二六ノ一二）
→亀井（一九八六）
- 亀井孝（一九五九）「春鶯囀」（『国語学』三九）→亀井（一九八四）
- 亀井孝（一九六〇）「在唐記の「本郷波字音」に関する解釈」（『国語学』四〇）
→亀井（一九八四）
- 亀井孝（一九六五）「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか—をめぐってかたる」（『一橋大学 人文科学研究』一二）→亀井（一九八六）
- 亀井孝（一九六九）「口語の慣用の徴証につきその発掘と評価」（『国語学』七六）
→亀井（一九八六）

- 亀井孝（一九七二）「分科討論会 漢字音と国語音—中世を中心に—」における発言の記録
（『国語学』九〇）
- 亀井孝（一九七三）『日本語系統論のみち（亀井孝論文集2）』（吉川弘文館）
- 亀井孝（一九八四）『日本語のすがたところ（一）音韻（亀井孝論文集3）』（吉川弘文館）
- 亀井孝（一九八六）『言語文化くさぐさ—日本語の歴史の諸断面—（亀井孝論文集5）』（吉川弘文館）
- 亀崎公一朗（二〇〇九）『東大国語研究室所蔵 白氏文集卷四 影写本』の研究」（二〇〇八年度東京大学卒業論文）
- 荻安誠（二〇〇一）『音声障害』（建帛社、言語聴覚療法シリーズ14）
- 川上稔（一九八〇）「アプからオーまで」（『國學院雑誌』八一ノ七）
- 川上稔（一九九〇）「昔の清音、濁音」（『国語研究』五三）
- 川本栄一郎（一九七二）「幕末の『獄中記』に見られるズーズー弁とガ行鼻濁音」（『国語学』九一）
- 川本栄一郎（一九九〇）「幕末『獄中記』に見られるガ行鼻濁音表記とその系譜」（『国語論究2 文字・音韻の研究』明治書院）
- 木田章義（一九七八）「濁音史摘要」（『論集日本文学・日本語1 上代』角川書店）
- 木田章義（一九八八）「日本語の音節構造の歴史—「和語」と「漢語」—」（『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所）
- 木田章義（一九八九）「P音統考」（『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社）
- 北沢一郎（一九四七）「ミュのつくコトバ」（『季刊国語』二）（金田一春彦の筆名）
- 清瀬義三郎則府（一九八五）「平安朝波行子音 p 音論」（『音声の研究』二一）
→清瀬（一九九一）
- 清瀬義三郎則府（一九九一）『日本語学とアルタイ語学』（明治書院）
- 金東昭（二〇〇三）『韓国語変遷史』（栗田英二訳、明石書店）
- 金水敏（二〇〇三）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店）
- 金田一京助（一九三五）『増補 国語音韻論』（刀江書院）
- 金田一春彦（一九五〇）『『五億』と『業苦』—『引き音節』の提唱—』（『国語と国文学』二七ノ一）
- 金田一春彦（一九五三）「国語アクセント史の研究が何の役に立つか」（『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂）→金田一春彦（二〇〇一）
- 金田一春彦（一九五五）「古代アクセントから近代アクセントへ」（『国語学』二二）
→金田一春彦（二〇〇一）
- 金田一春彦（二〇〇一）『日本語音韻音調史の研究』（吉川弘文館）
- 金田一春彦→北沢一郎
- 国広哲弥（一九六二）「国語長母音の音韻論的解釈」（『国語学』五〇）
- 黒田成幸（一九六七）「促音及び撥音について」（『言語研究』五〇）→黒田（二〇〇五）
- 黒田成幸（二〇〇五）『日本語からみた生成文法』（岩波書店）
- 呉英玉（二〇〇九）「日本漢音の直音表記について—三等韻C類の問題—」（『国語国文』七八ノ一〇）

- 河野六郎（一九三九）「朝鮮漢字音の一特質」（『言語研究』三）→河野（一九七九）
- 河野六郎（一九五四）「唐代長安音に於ける微母について」（『東京教育大学中国文化研究会会報』四ノ一）→河野（一九七九）
- 河野六郎（一九六八）『朝鮮漢字音の研究』（天理時報社）→河野（一九七九）
- 河野六郎（一九七九）『河野六郎著作集2』（平凡社）
- 国立国語研究所（一九九〇）『日本語の母音、子音、音節 調音運動の実験音声学的研究』（秀英出版、国立国語研究所報告一〇〇）
- 小林芳規（一九五八）「西大寺本不空羂索神呪經寛徳点の研究—釈文と索引—」（『国語学』三三）
- 小林芳規（一九六一）「平安時代の平仮名文の表記様式—語の漢字表記を主として— I・II」（『国語学』四四・四五）
- 小林芳規（一九六三）「訓点における拗音表記の沿革」（『王朝文学』九）→『論集日本語研究 中世語』（有精堂出版、一九八〇）
- 小林芳規（一九七一）「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特集号三）
- 小林芳規（一九七二）「国語史料としての高山寺本古往来」（高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺本古往来・表白』東京大学出版会、高山寺資料叢書第二冊）
- 小林芳規（一九七六）「石山寺蔵沙弥十戒威儀經平安中期角筆点」（『広島大学文学部紀要』三五ノ一）
- 小林芳規（一九八四）「石山寺蔵仏説太子須陀拏經平安中期点の訓読語について」（『訓点語と訓点資料』七一・七二合併）
- 小林芳規（一九八七）『角筆文献の国語学的研究 研究篇』（汲古書院）
- 小林芳規（二〇一二）『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 IV 中期訓読語体系』（汲古書院）
- 小松英雄（一九七一）『日本声調史論考』（風間書房）
- 小松英雄（一九七七）「アクセントの変遷」（『岩波講座 日本語 5 音韻』岩波書店）
- 小松英雄（一九八一）「日本語の音韻」（中央公論社『日本語の世界』第7巻）
- 小松寿雄（一九八五）『江戸時代の国語 江戸語』（東京堂出版、国語学叢書7）
- 斎藤純男（一九九七）『日本語音声学入門』（三省堂）
- 坂井健一編（二〇〇二）『宋本廣韻全譯 第5分冊（果攝・假攝）』（汲古書院）
- 酒井憲二（一九六五）「類聚名義抄の字順と配列」（山田忠雄編『本邦辞書史論叢』三省堂）
- 坂梨隆三（一九七六）「三馬の白圈について」（『岡山大学法文学部学術紀要』三六）→坂梨（二〇〇四）
- 坂梨隆三（二〇〇四）『近世の語彙表記』（武蔵野書院）
- 迫野虔徳（一九八七）「中世的撥音」（『国語国文』五六ノ七）→迫野（一九九八）
- 迫野虔徳（一九九七）「北野目代日記の『ん』『つ』の仮名」（『国語国文学研究』三二）→迫野（一九九八）
- 迫野虔徳（一九九八）『文献方言史研究』（清文堂出版）
- 佐々木勇（二〇〇四）「日本漢音における止摂合口字音の受容に見られる位相差」（『国語国文』七三ノ七）→佐々木（二〇〇九）

- 佐々木勇（二〇〇九）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院）
- 佐竹昭広（一九四六）「萬葉集短歌字余考」（『文学』一四ノ五）→佐竹（二〇〇九）
- 佐竹昭広（二〇〇九）『佐竹昭広集 第一巻 萬葉集訓詁』（岩波書店）
- 佐藤大和（一九八九）「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」
（『講座 日本語と日本語教育』第2巻、明治書院）
- 柴田武（一九五八）「音声—その本質と機能」（『国語教育のための国語講座2 音声の理論と教育』朝倉書店）
- 柴田武（一九六二）「音韻」（国語学会編『方言学概説』武蔵野書院）→『日本の言語学 第二巻 音韻』（大修館書店、一九八〇）
- 柴田武（一九八九）「語頭の濁音、その存在と発音」（『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社）
- 柴田武（二〇〇二）「《短信》九州・沖縄方言の2つの音声変化」（『国語学』二〇八）
- 柴田武（二〇〇三）「《短信》隠れている語頭濁音語」（『国語学』二一二）
- 寿岳章子（一九八三）『室町時代語の表現』（清文堂出版）
- 新村出（一八九七）「日本音韻研究史」（『新村出全集』第一巻所収）
- 新村出（一九〇六）「声音学講話」（『新村出全集』第二巻所収）
- 鈴木孝夫（一九六二）「音韻交替と意義分化の関係について」（『言語研究』四二）
- 住谷芳幸（一九九三）『『在唐記』字母積記載の日本語音節サの音価』
（『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂）
- 高田時雄（一九八八）『敦煌資料による中国語史の研究 九・十世紀の河西方言』
（創文社）
- 高松政雄（一九七〇）「ウ段拗音」（『国語国文』三九ノ七）
- 高松政雄（一九七一）「近世における『シウ』『シユ』」（『国語国文』四〇ノ二）
- 高松政雄（一九七八）『『慣用音』の一考察—『茶』について—』
（『論集日本文学・日本語3』角川書店）→高松（一九八二）
- 高松政雄（一九八二）『日本漢字音の研究』（風間書房）
- 高松政雄（一九九二）「所謂『新漢音』に就きて若干」（『人文論究』四二ノ二）
→高松（一九九三）
- 高松政雄（一九九三）『日本漢字音論考』（風間書房）
- 高松政雄（一九九七）『日本漢字音論究』（風間書房）
- 高山知明（一九九二）「日本語における接続母音の長母音化—その歴史的意味と発生の音声的条件—」（『言語研究』一〇一）
- 高山知明（一九九三）「複合語における促音挿入と接頭辞『ブッ』『ヒッ』等を持つ類との干渉回避について」（『香川大学国文研究』一八）
- 高山知明（一九九四）「複合語における促音の挿入について—もう一つの連濁—」
（『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂）
- 高山知明（一九九五）「促音による複合と卓立」（『国語学』一八二）
- 高山知明（二〇一〇）「音韻交替の二類と漢語の連濁」（大島弘子他編『漢語の言語学』くろしお出版）
- 高山知明（二〇一四）『日本語音韻史の動的諸相と蜷縮涼鼓集』（笠間書院）

- 高山倫明（一九九二 a）「連濁と連声濁」（『訓点語と訓点資料』八八）
→高山倫明（二〇一二）
- 高山倫明（一九九二 b）「清濁小考」（『日本語論究 2 古典日本語と辞書』和泉書院）
→高山倫明（二〇一二）
- 高山倫明（二〇〇一）「連濁の音声学的蓋然性」（『筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念
論文集』風間書房）→高山倫明（二〇一二）
- 高山倫明（二〇〇六）「四つ仮名と前鼻音」（『筑紫語学論叢 II』風間書房）
→高山倫明（二〇一二）
- 高山倫明（二〇一二）『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房）
- 高山林太郎（二〇一一）「岡山県妹尾方言における両唇ふるえ音」（『第 92 回研究発表会
発表原稿集』日本方言研究会）
- 田久保周誉（一九四四）『批判悉曇学』（山喜房佛書林）
- 武内和弘・福田登美子他（二〇〇一）『口蓋裂・構音障害』（協同医書出版社、アドバン
スシリーズ・コミュニケーション障害の臨床 6）
- 千葉軒士（二〇一三）「キリシタン・ローマ字文献の撥音表記について」
（『訓点語と訓点資料』一三一）
- 張琨（一九九三）『漢語方音』（台湾学生書局、中国語文叢刊15）
- 築島裕（一九六三）「ツンザクとヒツサグとの語源について」（『国語学』五四）
- 築島裕（一九六七）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』
（東京大学出版会）
- 築島裕（一九六九）『平安時代語新論』（東京大学出版会）
- 築島裕（一九八五）「正倉院聖語蔵大智度論古点及び央掘魔羅經古点について」
（『正倉院年報』七）
- 築島裕（一九八六）『平安時代訓点本論考 フコト点図・仮名字体表』（汲古書院）
- 築島裕（一九八七）『平安時代の国語』（東京堂出版、国語学叢書 3）
- 築島裕（一九九一）「架蔵辨正論卷第三保安点」（『古典研究会創立二十五周年記念国書漢
籍論集』汲古書院）
- 築島裕（一九九六）『平安時代訓点本論考 研究篇』（汲古書院）
- 築島裕編（二〇〇七～〇九）『訓点語彙集成』（全八巻＋別巻）（汲古書院）
- 月本雅幸（一九八〇）「東寺蔵不動儀軌万寿二年点」（『訓点語と訓点資料』六五）
- 豊島正之（一九八四）『開合』について」（『国語学』一三六）
- 豊島正之（一九九二）「濁音法則」「清濁」（『三省堂ぶっくれっと』九七・九八）
- 中里龍雄（一九三二 a）「梵学験者行智を憶ふ一帝大池畔の碑を見て一」
（『宗教研究』新九ノ一）
- 中里龍雄（一九三二 b）「新資料による行智阿闍梨伝」（『修験』五五）
- 中田（金児）祝夫（一九四七）「ハ行動詞の音便形の沿革」（『国語と国文学』二四ノ七）
→中田（一九五四）
- 中田祝夫（一九五一）「中古音韻史上の一問題」（『国語学』六）→中田（一九五四）
- 中田祝夫（一九五四）『改訂版 古点本の国語学的研究 総論篇』（勉誠社）
- 中田祝夫（一九八〇）『正倉院本地蔵十輪經卷五・七元慶点』（勉誠社、古点本資料叢刊

2)

- 中村幸彦（一九七一）「近世語彙の資料について」（『国語学』八七）
- 中本謙（二〇一一）「p音再考—琉球方言ハ行子音^{すじょう}p音の素性—」
（『日本語の研究』七ノ四）
- 中本正智（一九七六）『琉球方言音韻の研究』（法政大学出版局）
- 西崎亨（一九九八）『東大寺図書館蔵本「法華文句」古点の国語学的研究 研究篇』
（おうふう）
- 沼本克明（一九七一）「唐代輕唇音化と日本漢音」（『国文学攷』五五）→沼本（一九八二）
- 沼本克明（一九七二）「高山寺本古往來の音韻」（高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺
本古往來・表白』東京大学出版会、高山寺資料叢書第二冊）
- 沼本克明（一九八〇）「臻撮合転舌齒音字の仮名遣について」（『信州大学人文科学論集』
一四）→沼本（一九八二）
- 沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院）
- 沼本克明（一九八四）「所謂新漢音資料としての『九方便』『五悔』の音読資料について」
（『鎌倉時代語研究』七）→沼本（一九九七）
- 沼本克明（一九八六）『日本漢字音の歴史』（東京堂出版、国語学叢書10）
- 沼本克明（一九八八）「日本語のモーラ音素『ン』の通時的背景寸考」（『言語習得及び異
文化適応の理論的・実践的研究（広島大学）』1）→沼本（一九九七）
- 沼本克明（一九九二a）「字音直読資料の長音表記の変遷—音節構造との関係—」
（『訓点語と訓点資料』八八）→沼本（一九九七）
- 沼本克明（一九九二b）「長音表記漢語の史的背景—詩歌（シイカ）等—」
（『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院）→沼本（一九九七）
- 沼本克明（一九九五）「字音仮名遣いについて」（築島裕編『日本漢字音史論輯』
汲古書院）
- 沼本克明（一九九七）『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐって—』（汲古書院）
- 吐師道子・小玉明菜・三浦貴生・大門正太郎・高倉祐樹・林良子（二〇一四）「日本語語
尾撥音の調音実態—X線マイクロビーム日本語発話データベースを用いて—」
（『音声研究』一八ノ二）
- 橋本進吉（一九二八）「波行子音の変遷について」（『岡倉先生記念論文集』所収）
→橋本（一九五〇）
- 橋本進吉（一九二九）「近世国語学史」（『橋本進吉博士著作集 第九・十冊』岩波書店、
一九八三）
- 橋本進吉（一九三二）「国語に於ける鼻母音」（『方言』二ノ一）→橋本（一九五〇）
- 橋本進吉（一九五〇）『橋本進吉博士著作集第四冊 国語音韻の研究』（岩波書店）
- 長谷部隆諦（一九二六）「ㇿ字の音に就いて」（『密教研究』二二）
- 服部四郎（一九三二）『琉球語』と『国語』との音韻法則（『方言』二ノ七・八・一〇
・一二）→服部（一九五九）
- 服部四郎（一九五一）『音韻論と正書法—新日本式つづり方の提唱—』（研究社）→新版
（大修館書店、一九七九）

- 服部四郎（一九五五）「音韻論（1）」（『国語学』二二）→服部（一九六〇）
- 服部四郎（一九五九 a）『日本語の系統』（岩波書店）
- 服部四郎（一九五九 b）「奄美群島の諸方言について—沖繩・先島諸方言との比較—」（『人類科学』IX）→服部（一九五九 a）
- 服部四郎（一九六〇）『言語学の方法』（岩波書店）
- 服部四郎（一九七六）「琉球方言と本土方言」（伊波普猷生誕百年記念会編『沖繩学の黎明』沖繩文化協会）
- 服部四郎（一九七八～七九）「日本祖語について 1～22」（『月刊言語』七ノ一～八ノ一二）
- 服部四郎（一九八〇）「音節」（国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版）
- 服部 NSNT →服部（一九七八～七九）
- 濱田敦（一九四六）「促音沿革考」（『国語国文』一四ノ一〇）→濱田（一九八六）
- 濱田敦（一九四九）「促音と撥音」（『人文研究』一ノ一・二）→濱田（一九八六）
- 濱田敦（一九五一）「長音（上・下）」（『人文研究』二ノ五・六）→濱田（一九八六）
- 濱田敦（一九五二 a）「撥音と濁音との相関性の問題—古代語における濁子音の音価—」（『国語国文』二一ノ三）→濱田（一九八四）
- 濱田敦（一九五二 b）「弘治五年朝鮮板『伊路波』諺文対音攷」（『国語国文』二一ノ一〇）→濱田（一九七〇）
- 濱田敦（一九五四 a）「音便—撥音便とウ音便との交錯—」（『国語国文』二三ノ三）→濱田（一九八六）
- 濱田敦（一九五四 b）「ハ行音の前の促音—p 音の発生—」（『国語学』一六）→濱田（一九八三）
- 濱田敦（一九五五）「国語音韻体系に於ける長音の位置—特にオ段長音の問題—」（『国語学』二二）→濱田（一九八三）
- 濱田敦（一九六〇）「音韻史」（『国語と国文学』三七ノ一〇）→濱田（一九八四）
- 濱田敦（一九七〇）『朝鮮資料による日本語研究』（岩波書店）
- 濱田敦（一九七一）「清濁」（『国語国文』四〇ノ一一）→濱田（一九八三）
- 濱田敦（一九八三）『続朝鮮資料による日本語研究』（臨川書店）
- 濱田敦（一九八四）『日本語の史的研究』（臨川書店）
- 濱田敦（一九八六）『国語史の諸問題』（和泉書院）
- 林恵一（一九八一）『『康熙字典』の〈茶〉について』（『書陵部紀要』三二）
- 林史典（一九六九）「九条家本法華経音の脱落部について」（『国語学』七九）
- 林史典（一九八〇）「吳音系字音における舌内入声音のかな表記について」（『国語学』一二二）
- 林史典（一九八二）「日本の漢字音」（中田祝夫編『日本の漢字』中央公論社、日本語の世界 4）
- 林史典（一九八三）「中古漢語の介母と日本吳音」（『文芸言語研究』言語篇 8）
- 林史典（二〇〇一）「九世紀日本語の子音音価—日本語音韻史における文献学的考察の意味と方法—」（『国語と国文学』七八ノ四）
- 早田輝洋（一九七七 a）「生成アクセント論」（『岩波講座 日本語 5 音韻』）
- 早田輝洋（一九七七 b）「日本語の音韻とリズム」（『伝統と現代』四五）

- 早田輝洋（一九九六）「上代日本語の音韻をめぐって（上・下）」（『月刊言語』平成八年九月・十月号）
- 早田輝洋（一九九八）「上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」（『音声研究』二ノ一）
- 早田輝洋（二〇一六）「生成音韻論による接近法」（高山倫明・前田広幸編『音韻史』岩波書店、シリーズ日本語史1）
- バンス、ティモシー・J（二〇一五）「連濁の不規則性とローゼンの法則」（『国立国語研究所論集』9）
- 肥爪周二（一九九三a）「悉曇学とワ行」（『国語と国文学』七〇ノ二）
- 肥爪周二（一九九三b）「悉曇要集記奥文の音図をめぐって」（『松村明先生喜寿記念国語研究』明治書院）
- 肥爪周二（一九九五）「日本漢字音における喉内鼻音韻尾の鼻音性とその表記—清濁の対立との相関—」（『明海日本語』一）
- 肥爪周二（一九九六）「日本漢字音における喉内鼻音韻尾の鼻音性—「㊦イ」の形をとる場合—」（『山口明徳教授還暦記念 国語学論集』明治書院）
- 肥爪周二（一九九七a）「行智の悉曇学とその発達段階」（『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』三〇）
- 肥爪周二（一九九七b）「悉曇学者行智の江戸語音声観察—ガ行音の場合—」（『明海日本語』三）
- 肥爪周二（一九九八）「悉曇学より日本語研究へ—連声をめぐって—」（『日本語学』一七ノ七）
- 肥爪周二（二〇〇〇）「日本韻学用語攷（一）—清濁—」（『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』三三）
- 肥爪周二（二〇〇一）「ウ列開拗音の沿革」（『訓点語と訓点資料』一〇七）
- 肥爪周二（二〇〇二）「ハ行子音をめぐる四種の『有声化』」（『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』三七）
- 肥爪周二（二〇〇三a）「清濁分化と促音・撥音」（『国語学』二一三）
- 肥爪周二（二〇〇三b）「拗音仮名『茶（茶）』をめぐって」（『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』三九）
- 肥爪周二（二〇〇四）「結合標示と内部構造標示」（『音声研究』八ノ二）
- 肥爪周二（二〇〇五a）「唐音系字音」（『朝倉日本語講座2文字・書記』朝倉書店）
- 肥爪周二（二〇〇五b）「音韻史—拗音をめぐって」（『國文學 解釈と教材の研究』五〇ノ五、日本語の最前線）
- 肥爪周二（二〇〇六）「濁音標示・喉内鼻音韻尾標示の相関—観智院本類聚名義抄を中心に—」（『訓点語と訓点資料』一一六）
- 肥爪周二（二〇〇七）「閉鎖と鼻音」（『日本語学論集』三）
- 肥爪周二（二〇〇八）「撥音史素描」（『訓点語と訓点資料』一二〇）
- 肥爪周二（二〇一〇）「古典語の連濁—二つの未解決問題—」（『古典語研究の焦点』武蔵野書院）
- 肥爪周二（二〇一一）「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」（『訓点語と訓点資料』一二七）

- 肥爪周二 (二〇一四 a) 「書評 高山倫明著『日本語音韻史の研究』」
 (『国語と国文学』九一ノ二)
- 肥爪周二 (二〇一四 b) 「Φ音便について」(『訓点語と訓点資料』一三二)
- 肥爪周二 (二〇一五 a) 「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」(近代語学会編
 『近代語研究』一八)
- 肥爪周二 (二〇一五 b) 「ハ行子音の歴史—多様性の淵源—」(『日本語学』三四ノ一〇)
- 肥爪周二 (二〇一六 a) 「『ひいやり』『ふうわり』から『ひんやり』『ふんわり』へ—撥
 音史からの検討—」(近代語学会編『近代語研究』一九)
- 肥爪周二 (二〇一六 b) 「音韻史 拗音をめぐる2つのストーリー」(大木一夫・
 多門靖容編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房)
- 平野尊識 (一九七四) 「連濁の規則性と起源」(『文学研究』七一)
- 平山久雄 (一九六六) 「切韻における蒸職韻と之韻の音価」(『東洋学報 東洋文庫和文
 紀要』四九ノ一)
- 平山久雄 (一九六七 a) 「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」(『北海道大学文学部紀要』
 一五ノ二)
- 平山久雄 (一九六七 b) 「中古漢語の音韻」(牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編
 『中国文化叢書 1 言語』大修館書店)
- 深澤はるか (二〇〇九) 「最適性理論における共時と通時の融合」(『月刊言語』三八ノ二)
- ペラルル、トマ (二〇一六) 「日琉祖語の分岐年代」(田窪行則/ジョン・ホイットマン
 /平子達也編『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語の再建にむけて』くろしお出版)
- 福島直恭 (二〇〇二) 「『くあぶない ai』が『くあぶねえ e:]』にかわる時 日本語の変化の過
 程と定着」(笠間書院)
- 古田東朔 (一九七二) 『国語学史』(築島裕との共著、東京大学出版会)
- ホイットマン、ジョン (二〇一六) 「日琉祖語の音韻体系と連体形・已然形の起源」
 (田窪行則/ジョン・ホイットマン/平子達也編『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語
 の再建にむけて』くろしお出版)
- 前川喜久雄 (一九八九) 「母音の無声化」(杉藤美代子編『講座 日本語と日本語教育
 第2巻 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院)
- 松尾拾 (一九四九) 「慈光寺蔵大般若経の字音点について」(『国語学』三)
- 松村明 (一九五三) 「江戸語における語接続上の音韻現象—『浮世風呂』『浮世床』を資
 料として—」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』四) →松村 (一九五七)
- 松村明 (一九五五) 「江戸語における連母音の音訛」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』
 七) →松村 (一九五七)
- 松村明 (一九五七) 『江戸語東京語の研究』(東京堂)、増補版 (東京堂出版、一九九八)
- 松本克己 (一九七五) 「古代日本語母音組織考—内的再建の試み—」
 (『金沢大学法文学部論集文学編』二二) →松本 (一九九五)
- 松本克己 (一九九五) 『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈』(ひつじ書房)
- 松森晶子 (二〇一七) 「北琉球におけるC系列2音節名詞の語頭音節の長音化—その原因
 について考える—」(『日本語の研究』一三ノ一)
- 馬淵和夫 (一九五九) 「上代・中古におけるサ行頭音の音価」(『国語と国文学』三六ノ一)

- 馬渕（一九六五）
- 馬渕和夫（一九六二）『日本韻学史の研究Ⅰ』（日本学術振興会）
→増訂版（臨川書店、一九八四）
- 馬渕和夫（一九六三）『日本韻学史の研究Ⅱ』（日本学術振興会）
→増訂版（臨川書店、一九八四）
- 馬渕和夫（一九六六）「上代語の清濁に関するひとつの見解」（『言語と文芸』四四）
→馬渕（一九九九）
- 馬渕和夫（一九七一）『国語音韻論』（笠間書院）
- 馬渕和夫（一九九三）『五十音図の話』（大修館書店）
- 馬渕和夫（一九九四）「もう一つの ng 音表記」（『訓点語と訓点資料』九四）
→馬渕（一九九六）
- 馬渕和夫（一九九六）『国語史叢考』（笠間書院）
- 馬渕和夫（一九九九）『古代日本語の姿』（武蔵野書院）
- 馬渕和夫（二〇〇六）『悉曇章の研究』（勉誠出版）
- 丸山徹（一九八一）「中世日本語のサ行子音—ロドリゲスの記述をめぐって—」
（『国語学』一二四）
- 水谷真成（一九七九）『梵語字典』（『梵漢対訳字類編』の影印及び解説、法蔵館）
- 満田新造（一九二〇）『『スキ』『ツキ』『ユキ』『ルキ』の字音仮名遣いは正しからず』
（『國學院雑誌』二六ノ七）→満田（一九六四）
- 満田新造（一九六四）『中国音韻史論考』（武蔵野書院）
- 三根谷徹（一九七二）『越南漢字音の研究』（東洋文庫論叢第五十三）
→三根谷（一九九三）
- 三根谷徹（一九九三）『中古漢語と越南漢字音』（汲古書院）
- 三宅武郎（一九三二）「濁音考」（音声学協会『音声の研究』五）
- 三宅武郎（一九三三）「仮名遣の研究」（明治書院『国語科学講座』Ⅻ）
- 宮島達夫（一九六一）「母音の無声化はいつからあったか」（『国語学』四五）
- 村山七郎（一九五四）「連濁について」（『言語研究』二六・二七）
- 村山七郎・大林太良（一九七三）『日本語の起源』（弘文堂）
- 森博達（一九九一）『古代の音韻と日本書紀の成立』（大修館書店）
- 森田武（一九七七）「日葡辞書に見える語音連結上の一傾向」（『国語学』一〇八）
- 森山隆（一九六二）「連濁—上代語における—」（『語文研究』一四）→森山（一九七一）
- 森山隆（一九六七）「上代における不連濁語の周辺」（『言語科学』三）→森山（一九七一）
- 森山隆（一九七一）『上代国語音韻の研究』（桜楓社）
- 安田尚道（二〇〇三）「石塚龍麿の連濁論—『古言清濁考』を読む—」（訓点語学会第十八回研究発表会要旨）
- 屋名池誠（一九九一）「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について 付・連濁論
原論文『日本語の連濁』全訳」（『百舌鳥国文』一一）
- 屋名池誠（一九九二）「母音脱落—日本語上代中央方言資料による形態音韻論的分析—」
（『女子大文学（大阪女子大学）』四三）
- 柳田征司（一九八五）『室町時代の国語』（東京堂出版、国語学叢書5）

- 柳田征司（一九九三）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』（武蔵野書院）
- 柳田征司（一九九八）『室町時代語資料としての抄物の研究』（武蔵野書院）
- 柳田征司（二〇〇二）「濁音の前の鼻母音—その成立・衰退と音便—」
（『国語と国文学』七九ノ一一）
- 柳田征司（二〇〇四）「拗音」（『国語語彙史の研究』二三、和泉書院）
- 山口明穂（一九八九）『国語の論理』（東京大学出版会）
- 山口仲美（一九七三）「続中古象徴詞の語音構造—撥音・長音・促音に関する問題をふくむ語例を中心に—」（『紀要（共立女子大学短期大学部文科）』一六）
→山口仲美（一九八四）
- 山口仲美（一九八四）『平安文学の文体の研究』（明治書院）
- 山口佳紀（一九六六）「東大国語研究室蔵惠果和上之碑文古点—解説文と調査報告—」
（『訓点語と訓点資料』三三）
- 山口佳紀（一九六七）「高山寺蔵惠果和尚之碑文古点」（『訓点語と訓点資料』三五）
- 山口佳紀（一九七四）「古代日本語における語頭子音の脱落」（『国語学』九八）
→山口佳紀（一九八五）
- 山口佳紀（一九七七）「上代における音節の脱落」（『五味智英先生古稀記念上代文学論叢』
笠間書院、論集上代文学第八冊）→山口佳紀（一九八五）
- 山口佳紀（一九八二）「促音や撥音ははたして中国語の影響か」（『国文学 解釈と教材の
研究』二七ノ六）→山口佳紀（二〇一一）
- 山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂）
- 山口佳紀（一九八八）「古代語の複合語に関する一考察—連濁をめぐる—」
（『日本語学』七ノ五）→山口佳紀（二〇一一）
- 山口佳紀（二〇一一）『古代日本語史論究』（風間書房）
- 山田孝雄（一九〇四）「連濁音の発生」（『國學院雑誌』一〇ノ八）
- 山田幸宏（一九八三）「土佐方言サ行子音と上代サ行子音」（『国語学』一三三）
- 湯沢質幸（一九八七）『唐音の研究』（勉誠社）
- 湯沢質幸（一九九六）『日本漢字音史論考』（勉誠社）
- 吉田澄夫（一九五七）「江戸時代の国語」（土井忠生編『日本語の歴史』至文堂）
- 吉田金彦（一九五七）「中古日本呉音の表記史的考察—法華経単字の反切と字音をめぐる
て—」（『静岡女子短期大学紀要』四）→吉田金彦（二〇一三）
- 吉田金彦（一九五九）「訓点拾遺五題」（『訓点語と訓点資料』一一）
- 吉田金彦（二〇一三）『古辞書と国語』（臨川書店）
- 渡辺修（一九五三）「図書寮蔵本類聚名義抄と石山寺蔵本大般若経字抄とについて」
（『国語学』一三・一四）
- 渡辺修（一九七一）「類聚名義抄の和音の性格」（『大妻女子大学文学部紀要』三）
- 渡辺英明（一九三七）「行智師の音韻研究概説—音韻学的述作中に於けるものを中心とし
て—」（『密教研究』六一・六二）
- Bernthal, John E. & Bankson, Nicholas W.（二〇〇一）『構音と音韻の障害』（船山美奈子・
岡崎恵子監訳）協同医書出版（原著の四版（一九九八）の日本語訳）

- Clark, Eve V. & Bowerman, Melissa (一九八六) On the Acquisition of Final Voiced Stops. In J. A. Fishman, A. Tabouret-Keller, M. Clyne, Bh. Krishnamurti, & M. Abdulaziz (Eds.), *The Fergusonian impact, Vol. 1: From Phonology to Society*.
- Fey, M. E., & Gandour, J. (一九八二) Rule Discovery in Phonological Acquisition. *Journal of Child Language*, 9.
- Grierson, George. (一九二二) Spontaneous Nasalization in the Indo-Aryan Language. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain*.
- Hayata, Teruhiro (二〇〇〇) The Liquid and Stem-final Vowel Alternations of Verbs in Ancient Japanese. *Gengo Kenkyu* 118.
- Hizume, Shuji (二〇一六c) Some Questions Concerning Japanese Phonology: A Historical Approach (『*ACTA ASIATICA*』 111)
- Irwin, Mark (二〇一六) A rendaku bibliography. → Vance & Irwin (二〇一六)
- Ito, Junko & Mester, Arimin (二〇〇三) *Japanese Morphophonemics, Markedness and Word Structure*. The MIT Press
- Kuroda, S. Y. (二〇〇一) “Rendaku” *Japanese/Korean Linguistics* 10.
- Lange, Roland A. (一九七三) *The Phonology of Eight-century Japanese*. Tokyo: Sophia University.
- Lyman, Benjamin Smith. (一八九四) The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds. *Oriental Studies*. (屋名池一九九一による)
- Nasukawa, Kuniya (二〇〇五) *A Unified Approach to Nasality and Voicing*, Mouton.
- Ohara, John J. (一九八二) The Phonological End Justifies Any Means. S. Hattori & K. Inoue (eds.), *Proceeding of the XIIIth International Congress of Linguistics*. (三省堂)
- Ohara, John J. & Ohara, Manjari (一九九三) The Phonetics of Nasal Phonology: Theorems and Data. *Phonetics and Phonology, Volume 5, Nasals, Nasalization, and the Velum*.
- Otsu, Yukio (一九八〇) “Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems” in : MIT Working Papers in Linguistics : *Theoretical Issues in Japanese Linguistics* 2.
- Pellard, Thomas (二〇一六) 「琉球諸語の古さと新しさ—母音と子音について—」 (日本語学会『二〇一六年度春季大会予稿集』)
- Rosen, Eric Robert (二〇〇一) Phonological processes interacting with the lexicon: Variable and non-regular effects in Japanese phonology. Unpublished doctoral dissertation, University of British Columbia. (バンス二〇一五による)
- Rosen, Eric (二〇〇三) Systematic Irregularity in Japanese *Rendaku*: How the grammar mediates patterned lexical exceptions. *Canadian Journal of Linguistics* 48.
- Unger, James Marshall (一九七五) Studies in Early Japanese Morphophonemics. Doctoral dissertation, Yale University.
- Vance, Timothy J. (一九八二) On the Origin of Voicing Alteration in Japanese Consonants. *Journal of the American Oriental Society*. 102.
- Vance, Timothy J & Irwin, Mark (ed.) (二〇一六) *Sequential Voicing in Japanese: Papers from the NINJAL Rendaku Project* (Studies in Language Companion Series)

論文の内容の要旨

「序論」においては、本論文における議論の前提となる、いくつかの事柄を整理した。

「本論」は、「拗音論」「二重母音・長母音論」「撥音・促音論」「清濁論」に分かれる。

第一部「拗音論」においては、日本語における「拗音（開拗音・合拗音）」の分布の偏りを手がかりに、いくつかの問題について考察を行う。

序章「拗音—その概念と分布の偏り—」において、「拗音」の概念規定をした上で、日本語（呉音・漢音・唐音・オノマトペ）における拗音の分布の偏りを整理する。

第一章「ア段拗音—拗音仮名『茶（茶）』をめぐって—」においては、日本漢字音（呉音・漢音）に、シャ・ジャ以外の単独ア段拗音が原則として存在しないことを指摘、中国原音に遡って問題を整理する。その上で、観智院本『類聚名義抄』の「茶（茶）」を様々な角度から検討して、拗音仮名「チャ」として扱うのが相応しいことを確認する。

第二章「ウ段開拗音の沿革」においては、ウ段拗音が原則としてシュ・ジュしか存在しなかったことを明らかにした上で、そのような分布の偏りが生じた理由を、開拗音の古表記であるア行表記が、ウ段においてのみ定着したためであるとの見通しを立て、シュ・ジュのみが例外になった理由、他の音形への波及、若干存在する例外などについて考察する。

第三章「唇音と拗音」においては、唇音のウ段拗音ヒュ・ビュ・ミュが、長く伸ばす形でも稀であること、同時に、唇音のオ段拗音がヒョー・ビョー・ミョーのように長く伸ばす形でも存在しないことをめぐり、呉音と漢音のそれぞれの場合について考察する。

第四章「拗音と韻尾の共起制限」においては、キャン・キャイ・キャツなど、拗音と前寄韻尾（-m, -p, -n, -t, -i）の組み合わせが、シュン・ジュン・シュツ・ジュツしか実質的に存在しないことについて、第二章での議論を踏まえつつ、朝鮮漢字音と比較しながら検討し、これが見かけ上の共起制限に過ぎないことを論じる。

第五章「合拗音の受容」においては、日本漢字音において、開拗音と合拗音の受け入れ方（分布・表記・歴史）が根本的に異なることを指摘し、開拗音は「分解圧縮法」、合拗音は音素結合の《あきま》に嵌め込む形で受け入れたとする解釈を提案する。

付章「サ行子音の音価とサ行開拗音」においては、日本語史上、サ行（ザ行）開拗音が特殊な振る舞いをしてきたことを、サ行子音の音価（調音位置・調音法ともに幅があった）の問題と絡めて考察し、サ行（ザ行）開拗音が、他の行の開拗音と、カ行（ガ行）合拗音との双方に通じる性質を持っていたことを明らかにする。

第二部「二重母音・長母音論」においては、/CVV/音節の歴史を考察する。

第一章「/CVV/音節（二重母音）の歴史」においては、特に二重母音/CV_Uが長母音化してゆく経過について整理する。この大きな流れに連動して、アヤワ三行の統合、開拗音の日本語音韻体系への定着、合拗音の整理が起こり、日本語の音節組織は、五十音図的体系から拡大五十音図的体系へと組み替えられたことを論じる。

第二章「長母音成立の音韻論的解釈」においては、現代語に存在する引き音素/r/の成立について考察する。第一章で扱った二重母音/CV_Uの長母音化の問題を、体系的見地から音韻論的に解釈し直し、引き音素/r/の成立の時期はオ段長音開合が統合された時点であり、それ以前はすべて二重母音と解釈すべきことを主張する。

第三章「江戸語の連母音音訛」においては、江戸語における二重母音/CV_J/の長母音化の問

題を考察する。つまり、江戸語のある位相においては、古代語のすべての二重母音音節が長母音化するものであり、これらを総合的に整理した。

第三部「撥音・促音論」においては、日本語における/CVC/音節の歴史を考察する。

第一章「二種の撥音便」においては、平安時代の撥音便に、m音便とn音便の二種があったとする中田祝夫説に対する修正案（n音便→音価無指定の量的撥音便）を提出する。それにより、現代語の撥音と促音との非対称性についても、合理的に説明が可能になることを論じる。

第二章「m音便とウ音便」においては、複数の撥音音素の統合の歴史に関わる先行研究を検討し、「ウ」で表記される第三の撥音の位置づけについて、複数の証拠を挙げることによってその存在を裏付け、本論文の立場からの解釈を提示する。

第三章「リ延長強勢オノマトペー「ひいやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふんわり」へー」においては、現代語オノマトペに見られる「ひんやり」「ぼんやり」「ふんわり」「やんわり」のような、接近音の前の撥音挿入が、江戸時代以降に現れる新しい形であり、古くは「ひいやり」「ふうわり」等であったことを指摘し、そのような変化が生じた理由の一つとして連声現象の衰退を挙げる。加えて、「*ゆんらり」「*ふんらり」のようなラ行音の前の撥音挿入には類推が及ばなかった理由も検討する。

第四章「撥音と鼻音韻尾」においては、借用語音韻論の立場から、第一章・第二章で提示した本論文の撥音史の枠組みを前提に、漢字音の三種の鼻音韻尾（m韻尾・n韻尾・ng韻尾）が、日本語に三様に受け入れられていったことを明らかにする。特にn韻尾の不安定性が、国語音の量的撥音便の性質に対応していることを明らかにする。

第五章「ng韻尾・清濁の表記の相関」においては、濁音が清音の変種と把握されていたのと同様に、漢字音のng韻尾が母音の変種として把握されていたと指摘し、表記などの上でも平行関係があることを、さまざまな資料から明らかにする。

第六章「ng韻尾の鼻音性—㊦イの形を取る場合—」においては、ng韻尾の鼻音性標示が「～ウ」に対応する場合に偏り、「㊦イ」に対応するものについては稀であることをめぐり、中国原音の性質、連声濁現象などを検討し、その原因を考察する。その上で、古代音韻学の柱の一つである悉曇学において、漢字音の鼻音韻尾と対応させられる空点が、もっぱら「ム・ン・ウ」とのみ結びつきやすかったことが原因であったとする解釈を提出する。

第七章「Φ音便について」においては、撥音便において、音価の固定したm音便と、後続音に依存する量的撥音便が存在したとする第一章での主張を押し広め、促音にも音価が固定したものがあつたのではないかと予想を立てた。そして、その候補として、一部の文献資料においてハ行四段動詞の音便形が「ム」で表記される事例を取り上げ、それが築島裕の主張したΦ音便の表記だったとする解釈を提唱する。

第四部「清濁論」においては、日本語の清濁の対立に関わる問題を考察する。

第一章「清濁についての研究史—共通理解とすべき事柄—」においては、先行研究において論じられてきた日本語の清濁に関わる諸問題（音配列制限・表記・前鼻音・連濁・連声濁・アクセントに似た性質・用語）を整理する。

第二章「ガ行鼻濁音の歴史」においては、伝統的な東京方言において鼻音性を維持しているガ行鼻濁音 [-ŋ-] の歴史を取り上げる。従来知られていなかった資料（山県大弐および行智の悉曇学資料）を紹介する。

第三章「連濁の起源」は、以下の三節からなる。

第一節「連濁の起源についての諸説」においては、従来の学説を大きく「同化説」「古音残存説」「連声濁説」に分類・紹介し、それぞれの問題点を指摘する。

第二節「内部境界強調説（再分割説）」においては、第一章で取り上げた日本語の清濁の対立が持つ諸特質、および、前節で指摘した従来の学説の問題点を、統一的に説明・解決できるような、第四番目の連濁の起源説（清濁の対立の起源説）を提案する。連濁現象は、その発生段階においては、弱化現象（同化説・連声濁説はこれに相当する）ではなく、語構成を明示するための強化現象、具体的には、結合標示のための声帯振動の継続と、語構成明示のための子音延長を両立するための「圧ぬき」の結果として、前鼻音が発達したのが、連濁の起源（同時に濁音の音声的起源）であったとする仮説である。

第三節「連濁をめぐる補説」においては、第二節において、論旨の見通しが悪くなるのを避けるために省略した数々の問題を、【補説①】から【補説⑱】として、本論文の立場から解説した。

第四章「龍麿の仮説」においては、上代語では、後項にあらかじめ濁音が含まれているときだけではなく、前項の末尾が濁音であるときにも連濁が阻止されたとする仮説を検証する。上代語においても濁音の連続自体を禁止する音配列則は存在しない以上、この仮説は疑わしく、実際に説得力を持つほどの証拠が存在しないことを明らかにした。

第五章「m音便の後の清濁」においては、「撥音便の後の清音は濁音化する」という見解を検証する。平安・鎌倉時代を中心とする資料を検討した上で、特にm音便の後では清音が清音のまま維持され得た可能性があることを主張した。